

---

# サヨナラを二度あなたに告げる

尖角

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サヨナラを二度あなたに告げる

### 【Nコード】

N2477W

### 【作者名】

尖角

### 【あらすじ】

余命を宣告された彼が、彼女に対してすること。  
その覚悟の重さを描いた作品。

(前書き)

なかなか個人的には気に入っていません。  
では、どうぞ！……！！

「嫌だよ!!」

「あなたと別れたくなんてないよ!!」



俺は、彼女に「さよなら」を告げる。

彼女の24歳の誕生日。

その日、俺は彼女と2人、近所のバーで飲んでいた。

ここは、俺達のよく来るデートスポット。

何しろ、ここは飯がうまい。

そして、店内がオシャレなものもお気に入りの理由の1つだった。

その日も、いつものように《日替わりコース5千円》というものを頼む。

そして、そんなコースも終盤に差し掛かったところで、俺はポケットに隠し持っていた指輪をテーブルの上に置いた。

そして、俺は大好きな彼女に言う。

「俺と結婚してくれないか？」と

彼女とは大学1年に出会った。

それから、6年の歳月が流れ、俺は結婚を申し込む。

彼女と付き合うことになったのは、俺のもうアピールが原因。

それはというと、俺が彼女に一目惚れをしたから…。

『俺が愛せるのは彼女しかない』と思ったからであった。

そんな感じで交際を始め、結婚を申し込み、日ごろの行いがよかつたためか、「いいよ、結婚しても」と彼女は言ってくれた。

こんなに嬉しい事が、他にあるだろうか？

心の底から好きな人と付き合えて、そして結婚できるなんてことがあるだろうか？

俺には生きた人生の何処を探しても見当たらない。

彼女と出会えた軌跡。 彼女と歩めた軌跡。



彼女と寄り添った軌跡。 彼女と、、

このすべてが俺にとっては重要で、俺にとってはすべてだった。

しかし、そんな人生が崩れ始めたのは、、

そんな幸せな人生が崩れたのは突然だった、、

ある日、俺は会社の定期健診で病院に行った。

いつも健康診断に行ったところで、「健康で何も言うことなんてないですよ！」と笑いながら医者が言うので、この日も『大丈夫だろう』と心のどこかで思っていた。

だって、何も俺には痛みとかさういった感情が出てなかったのだ

から…。

誰でも普通の病気ものなら 痛いから、どこか悪いのかな？ なん  
だか怠いな、熱でもあるのかな？ そういった感情が働くだろう。

しかし、俺のように何も感じずに、突然「余命3ヶ月です」と言  
われたらどうだろうか？

まだ、愛する人だっているというのに…。

まだ、やらなきゃいけないことだっているのに…。

俺には生きる意味が見えなくなった。

そうして過ぎた、彼女との1週間。

彼女には何も言えなくて、ただある思いが俺を強く打った。

『彼女には“幸せ”になってもらおう』という思いが…。

俺はその思いに導かれるままに、彼女を自分の家に呼んだ。

そもそも、俺は彼女とまだ籍もいれていない。

俺が彼女に結婚しようと言ったのは、約1ヶ月前。

だが、彼女も、そして、俺も、どちらも忙しい身だったので、結婚をするということは決めていても、実行にまでは移せていなかった。

しかし、それが不幸中の幸いであった。

なぜなら、俺は彼女をバツ1にしたくなかったからだ。

彼女を今から“振る”ということは、彼女をそういう状態にするということだ。

俺は彼女に、そんな重荷を背負わすことなんてできない。

俺には彼女を幸せにするという“天命”があるのだから…。

そう思い、俺は彼女を自宅に招いた。

そして、俺は彼女をリビングに誘い、席に座り、向かい側の席に彼女を座らせた。

「どうしたの?」

「こんな風に改まっちゃって…?」

そう、彼女が口を開いたので、俺は迷いをどこかに消し飛ばし、覚悟を決めて彼女に言った。

「別れよう…」

「もう、俺はお前を支えることはできない」

すると、彼女は笑った。

それも、腹を抱えて…。

彼女がなぜそんなことをしたかというところ、彼女は俺の話を“冗談”だと思っただけだから。

だが、少ししてから、彼女は俺の様子を見て、何かの“異変”に気付く。

『なんで、笑わないの？』

『もしかして…？』

『もしかして、本当は冗談なんかじゃなくて、』

『本当は、』

そして、彼女は叫んだ。

「嫌だよ！！」

「あなたと別れたくなんてないよ！！」

「嘘でしょ？」

「私と別れるなんて!!」

「お願い…」

「お願いだから、嘘だと言ってよ!!」

「なんでなの？」 「なんで突然？」

「あなたが結婚してって、この前言ったんでしょ？」

「あれは嘘だったの？」

「他に好きな人ができちゃったの？」

「ねえ！黙ってないで、答えてよ!!」

俺は、彼女にビンタをもらった。

そして、大きな愛も…。

彼女の愛は、俺達の仲では大きすぎた。

大きすぎたんだ。

俺も愛情を、彼女に注いだはずだった。

だが、俺の愛情よりも彼女の中にあつた思いの方が大きかった。

『くっそー!!』

『くっそおお!!!!』

叫びにならない思いを、俺は心で叫んだ。

彼女は俺の言葉を聞いて、泣き、叫び、そして指輪を置いて部屋から出て行った。

『これでいいんだ…』

『これで彼女は“幸せ”になれるのだから…』

俺はそう思い、彼女が部屋を出る時に言った、「しばらく、顔も見たくない!」「さよなら!」「という言葉を、心の中で“グツ”と噛みしめて思った。

俺の人生の何もかもが、崩れ落ちる。

俺の人生の何もかもが、崩れ落ちていく。

人は“幸せ”という渦の中で生きれば、それに報いるように“不幸”の谷へと落ちていくものだ。

俺はそう思った。



しかし、《余命3ヶ月です》という言葉は、真にはならなかった。

俺の容体は急変し、彼女と別れた6日後、俺は入院することになった。

希望は見つからず、自分でも“自分が終わる”ということが分かった。

《命の最後》というものだろうか？

そして、俺は意識が朦朧とする中で、夢を見た。

その夢の中で、俺の隣には彼女がいて、その2人の前には小さな小学生になるかどうかという年頃の女の子がいた。

多分、病気にならなかった時の人生なのだろう。

それは、俺には歩むことができなかった人生なのだろう。

俺は最後に笑った。

いいや、最後なんかじゃないのかもしれない。

これは始まりで、新しい人生ものがたりが始まるだけなのかもしれない。

俺は彼女を心に描き、『ありがとう』と『さよなら』を告げる。

そして、彼女に告げる。

『あなたが幸せでありますように……』と

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2477w/>

---

サヨナラを二度あなたに告げる

2011年10月9日15時01分発行